

今の苦難、後の栄光

【聖書箇所】 8章 18～25節

はじめに

●イエシュアは「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」と言われました。今回は、「神の口から出る一つ一つのことば」の部分で、「神から来る望み(希望)」に替えて、「人は望みによって生きる」存在であるということに心を留めてみたいと思います。

●多かれ少なかれ、私たちは望みをもって生きています。将来こうしてみたい。あんな人になりたい。こんな仕事をしてみたい。そんなところへ行ってみたい。あんな家に住んでみたい。こんな人と結婚したい・・・などなど。いろいろな理想や希望を抱いて生きています。もし私たちの中に希望というものがなければ、生きていくことに活力は生まれません。「つまんねえ」という思いがその人を支配するようになります。シラケの人生を歩むようになるのです。悲しいことに、クリスチャンでさえも「ツマンネー」と思っている人もいます。

●望みのないところに、私たちは努力しようとはしません。というより、努力する力が湧いてこないと言った方が正しいかもしれません。なぜ受験生たちは苦しくても勉強を頑張るのでしょうか。それは頑張れば希望する学校に入ることができるという望みがあるからです。なぜスポーツ選手はどんなに苦しくても日々努力するのでしょうか。それはやがて栄冠を手にするという望みを抱くからです。なぜ妊婦は産みの苦しみに耐えられるのでしょうか。それは新しい命が誕生するからです。苦しければ苦しいほど、それによって得られるときの喜びは大きいのです。ですから、大学に入る望みがない人は努力することを放棄します。また栄冠を手にする望みや、新しいものを生み出す望みが全くなければ、何も苦勞して頑張ることとはしくくなります。その力が湧いてこないからです。

●ある炭鉱での落盤事故で、助かった人と死んだ人とのその境は、生き埋めになった人が「必ず、助けが来る」という望みを持つか、反対に、もう駄目だと悲観して諦めてしまうかの違いだそうです。実際、落盤事故から三日目で助かった人がいました。その人は必ず助けが来ると信じたそうです。ですから、頑張ることができたのでした。

●このように、私たち人間は望みによって生き、望みによって生きる力を得、望みによって苦勞も厭わなくなるのです。そこで今回、ローマ人への手紙 8章 18節のみことばに目を留めてみたいと思います。

「今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」とパウロが語ったことばです。

1. 生ける望み(今の苦しみと後の栄光を天秤にかける)

●一般に、「望み」という場合には、将来もたらされる何か自分にとって良いこと、自分にとって幸せと思

えるようなことを期待しながら待っている人間の心の態度を意味します。不思議なことに、望むという態度は、人間にしかできないことです。人間だけが持つことのできる特性です。それはそれとして、一般的な望みは常にこの世のことに向けられ、その望みがかなえば、新たな望みを捜さなければなりません。そしてそれがいつもかなえられるという保障は何もないのです。しかし、聖書のいう「望み」は、イエシュアによってもたらされる確かな望みです。天に通じる梯子だと言われて、登って行ってみたら先がなかったというものでもありません。確かな梯子、天に通じる梯子です。聖書のいう「望み」は、実現するかどうかわからないという不確かなものではありません。将来なされる確かな望みです。そしてこの望みは、信仰によってのみ得られるのです。信仰による望みは、たとえ苦難の中にあっても、必ず、生きる力と勇気を与えてくれるものです。ですから、使徒ペテロはその手紙第一の中で、その望みを「**生ける望み**」と表現しました。その箇所を読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】I ペテロの手紙 1章 3～9節

- 3 私たちの主イエス・キリストの父なる神がほめたたえられますように。神は、ご自分の大きなあわれみのゆえに、イエス・キリストが死者の中からよみがえられたことによって、私たちを新しく生まれさせて、生ける望みを持つようにしてくださいました。
- 4 また、朽ちることも汚れることも、消えて行くこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。
- 5 あなたがたは、信仰により、神の御力によって守られており、終わりのときに現されるように用意されている救いをいただくのです。
- 6 そういって、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまの試練の中で、悲しまなければならぬのですが、
- 7 あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れのとときに称賛と光栄と栄誉になることがわかります。
- 8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。
- 9 これは、信仰の結果である、たましいの救いを得ているからです。

●この手紙が書かれた時代は、すでにクリスチャンに対する迫害が始まっていました。中にはこの迫害のために信仰を捨てる者も多くいました。そのような状況の中で、使徒ペテロはクリスチャンたちを勇気づけようとして書いた手紙がこの手紙です。ペテロは何をもってクリスチャンたちを勇気づけたのでしょうか。それはイエシュアによってもたらされた「生ける望み」に目を向けさせることによってでした。すなわち、それは朽ちることも、汚れることも、消えていくこともない資産(霊的財産)がすでに天にたくわえられていることに目を向けさせようとしたのです。

●この地上にどんな財産を築いたとしても、この世を去る時には何一つ持って行くことはできません。イエシュアは言われました。「自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物となり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、

盗人が穴をあけて盗むこともありません。」(マタイ 6:19~20)と。「天に宝を積む」とはどういうことでしょうか。私たちが宝を自分で積まなくても、天の父が御子イエシュアを通して、やがて私たちがそれを受け継ぐものとして、すでに天にたくわえておられます。とすれば、「天に宝を積む」とはどういうことでしょうか。「積む」ということは、私たちのいのちはこの地上だけで決して終わることなく、将来、すばらしい天にある資産が備えられていることを信じることを意味します。そしてその信仰によって生きることが、「天に宝を積む」ということの意味です。

●ローマ人への手紙 8 章 18 節のみことばに戻りましょう。パウロは「今の時のいろいろな苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。」と述べています。パウロがここで「考えます」と述べている言葉は、「数える、計算する」という意味の「ロギゾマイ」(λογίζομαι)ということばです。つまり、「今の時のいろいろな苦しみ」と「将来、もたらされる栄光」とを比較し、秤にかけて計算することで、今の苦しみは取るに足りないと思なすことです。

●確かに、パウロは人一倍キリストのために苦しみに遭った人です。Ⅱコリント 11 章はそのことがあかしされています。それによれば、

「私の労苦は彼ら(他の使徒のこと)よりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばであった」と述べています(Ⅱコリント 11:23~)。

「・・・このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。」(Ⅱコリント 11:28 節)

このように、パウロは外にも内にも重荷を負っていました。外面的には迫害を受け、内面的には教会に対する心づかいがありました。パウロには苦しみが続いてきたのです。ところがパウロは「今の時のいろいろな苦しみは」と述べています。「今」とは永遠に続くものではなく、終わりのあることを意味しています。パウロは来るべき栄光を待ち望んでいました。ですから、今の時の苦しみと将来啓示されようとしている栄光とを比較するならば、取るに足りないものだということを述べているのです。

●もしパウロが、自分の苦しみを、後の栄光と比べることをしなかったならば、彼は今の苦しみに押しつぶされてしまい、喜びも平安も力も失ってしまったに違いありません。神を信じ、神に従おうと願う者にとっては、この世は決して居心地の良いところではありません。しかしそれでも多くの者たちが、神に従って苦しむことを選び取って来たのです。パウロもペテロもステパノもこの道を選びました。

●ヘブル人への手紙 11 章 24 節以降にモーセのことが記されています。そこはローマ書 8 章 18 節のモーセ版とも言える箇所です。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 11 章 24~26 節

24 信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、

25 はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。

26 彼は、キリストのゆえに受けるそりを、エジプトの宝にまさる大きな富と見なしました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。

●「パロの娘の子」であるということは、社会的地位と名誉、王家の財、その権威と楽しみを約束するものです。しかしモーセは信仰によって、それらのはかなさを見抜き、神が示した苦難の道の方が「エジプトにまさる大きな富」であると計算したのです。私たちもしばしば人生の岐路に立たされ、重大な決断と選択をしなければならない時があります。そのような時に、何を抛り所として決断し、何を抛り所として選択すべきかを私たちは聖書から学び取らなければなりません。アブラハムとロト(創世記 13 章)の争いにおける選択もその一つです。ロトは一時的な、しかも自分の目に良いと思った方を選択しました。ロトはその選択によって、緑豊かな土地を得ましたがその結果はどうだったでしょうか。そこは罪に満ちた地として、神によって滅ぼされる運命にあった地でした。そして結果的には滅ぼされてしまったのです。しかしアブラハムは信仰によって選びました。選んだというより、神にゆだねたのです。一見、豊かとは思えないような地でしたが、後には(つまりメシア王国では)、すべての地がいやされて多くの実を得ることのできる地へと変えられるところの地です。しかも彼はその地を確実に、彼と彼の子孫が手にできるものとしてしました。

2. 救いの完成を待ち望むうめき

●さて、パウロの言う「今の時のいろいろな苦しみ」という、いわばこの世から受ける苦しみの他に、実はもう一つの苦しみがあるのです。その苦しみとは、私たちの救いがまだ完成していないことから来るものです。私たちのからだは、まだ完全には贖われてはいないのです(約束されていますが)。罪と死の原理と御霊の原理は依然として私たちの内で戦いを繰り返しています。しかし、その戦いもいずれは終わる時が来ます。その時が救いの完成の時です。ですから、それまで私たちは霊のうめきをもって、その時が来ることを待ち望んでいるのです(23 節)。そのうめきは、将来、必ず、間違いなく、完全な救いがもたらされるという望みがあるからこそ「うめく」のです。もしその望みがなければ「うめく」ことはしません。なぜなら、「うめき」とは言葉にならない「**産みの苦しみ**」を意味するからです。

●うめきをもって待ち望んでいるのは、私たちクリスチャンだけではありません。19 節によれば、被造物、つまり全被造物も苦しんで、うめいていることをパウロは語っています。春になれば美しい花が咲き、木々には青葉も出て緑の世界になります。小鳥も春を喜び、囀ります。子育ての時期がやって来て、親鳥たちが忙しくしています。動物たちも子を産み、すべてが生を楽しんでいるように見えます。多くの人々が、春を謳歌し、その美しさを楽しんでいます。しかし、自然界を見ると、そこには弱肉強食があり、激しい生存競争が繰り返されています。海の中でもイワシはサバに追われ、サバはマグロに追われ、そのマグロはイルカに追われ、イルカはサメに追われというふうに。しかし神がアダムを造られた世界ではそのようではなかったのです。すべてが良かったとされる自然界は、人間の罪によって呪われ、滅びの束縛と虚無の中に置かれてしまいました。人間が罪を犯したことによって、自分自身だけでなく、人間の支配の下に置かれたすべての被造物は、虚無に服せられ、滅びの束縛の中に閉じ込められてしまいました。ですから、全被造物は、人間が完全な贖い(救い)にあずかることを、切実な思いで(自然が人格化されていますが)待ち望

んでいるのです。

●もし、自然界が滅びの束縛から解放されるなら、再び、エデンの園のような状態に戻されるのです。すべての砂漠は緑豊かな草茂る地へと変えられ、狼は羊とともに宿り、ひょうは子やぎとともに伏し、雌牛と熊とはともに草を食べ、小さな子どもらもともに伏し、獅子も牛のようにわらを食う・・・そして全地の上に主の栄光が満ち、山も川も、木も草もすべてのものが喜びの歌声を上げると聖書は記しています(I 歴代誌 16:30~33)。これは聖書の約束であり、自然界にも滅びの束縛から解放されるという望みがあるのです。

●23 節「またそれ(全被造物)ばかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいる」クリスチャンには、完全な救いにあずかることを切望するうめきがあります。確かに私たちは、イエシュアを救い主と信じて救われたことによって、心の中に平安と喜びをいただいています。しかし聖霊は、霊的自由を妨げる肉体の中に、私たちがいまだ閉じ込められていることへのうめきを起こさせているのです。それはちょうど、籠の中に入れられた野鳥が、他の野鳥が天高く飛びながらさえずっているのを見て、籠を破って外に出たいという思いと同じことではないかと思えます。パウロはこのようなうめきをもって過ごした人でした。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント書 5 章 1~7 節

- 1 私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。
- 2 私たちはこの幕屋にあつてうめき、この天から与えられる住まいを着たいと望んでいます。
- 3 それを着たなら、私たちは裸の状態になることはないからです。
- 4 確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。そのことによって、死ぬべきものがいのちのにのまれてしまうためにです。
- 5 私たちをこのことにかなう者としてくださった方は神です。神は、その保証として御霊を下さいました。
- 6 そういっわけ、私たちはいつも心強いのです。ただし、私たちが肉体にいる間は、主から離れているということも知っています。
- 7 確かに、私たちは見るところによってではなく、信仰によって歩んでいます。

●下線の部分をもう一度読んでみましょう。「**確かにこの幕屋の中にいる間は、私たちは重荷を負って、うめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいと思うからでなく、かえって天からの住まいを着たいからです。**」とあります。これが御霊によるうめきです。私たちが天からの住まいのすばらしさにひとたび目が開かれるなら、このうめきはますます大きなものとなることでしょう。事実、主イエシュアが再び地上に再臨される時、主にある私たちはキリストと同じ栄光のからだの姿に変えられます。またその時は、私たちの目から涙が全く拭い去られ、もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない世界で、神とともに生き

るようになるのです。24 節に「**私たちは、この望みによって救われているのです。**」とありますが、御霊は私たちにうめきを与えることによって、キリストの再臨を待ち望ませ、この望みによって、私たちを墮落することから守っておられるのです。ですから、こうした「うめき」を与えられていることは、神の恵みと言えます。この地上において、ひたすら主を待ち望み、うめきつつ、今与えられている主のわざに励んで行きたいと思えます。

【新改訳改訂第3版】Ⅱコリント4章16～18節

16 ですから、私たちは勇気を失いません。たとえ私たちの外なる人は衰えても、内なる人は日々新たにされています。

17 今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

18 私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

1995.3.12